

2) [言い換え] ほかの言葉で言い換える

◆「ある言葉や文」を、「同じ意味のほかの言葉や文」に変えて書いたり、「具体的な例」などで説明したりすることがある。これを「言い換え」という。

言い換えて説明していることは、大事なポイントであることが多い。

「問い」の選択肢も、本文とは違う表現で言い換えられていることが多いので注意しよう。

☆ 例題4 問いに対する答えとして最もよいものを一つ選びなさい。

数学者アインシュタインや、作曲家モーツァルトは、ただ一つの能力に恵まれているから「天才」なのではない。方向が全く異なる二つの能力を持っているから「天才」なのだ。つまり、物事の細かい部分を詳しく見る能力と、物事の全体像を大きくつかむ能力を持ちあわせているのである。物事の詳細な部分を見ていこうとするのは職人的、全体像をつかもうとするのは学者的な見方と言うこともできる。この二方向の能力をどちらも身につけていることが重要な意味を持つ。

【問い】 この文章の内容として最も適切なものはどれか。

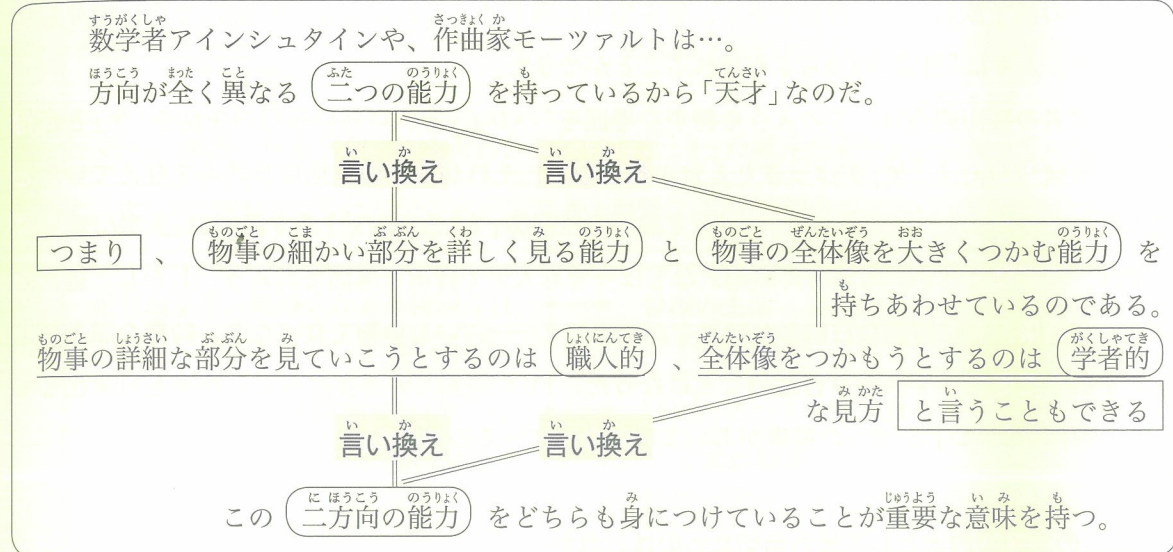
- 1 人は、職人的な見方、学者的な見方という二方向の能力を身につけるべきだ。
- 2 優れた能力は「天才」だけが持っているというわけではない。
- 3 「天才」には物事の全体像を大きくつかむ能力がある。
- 4 「天才」は異なる二方向の能力を持ちあわせている。

全体をつかもう

1) キーワードからテーマを推測する

能力、「天才」 → テーマは、天才の能力？

2) 「言い換え」に注目する



3) 全体をまとめる

「天才」は、物事の細かい部分を詳しく見る(=職人的)能力と、物事の全体像をつかむ(=学者的)能力という、方向が異なる二つの能力をどちらも持っている。

選択肢と比べよう

- 1: 身につけるべきだとは書かれていない。
- 2: 天才でない人については書かれていない。
- 3: 全体像を大きくつかむ能力だけでは足りない。
- 4: 正解

- ・「言い換え」になっているところは、＝などでつなごう。
- ・「つまり」「すなわち」など、言い換えの接続表現に注目。□をつけよう。
- ・「(A)を(B)と言う/呼ぶ」などの表現は「言い換え」。

2) [言い換え] ほかの言葉で言い換える

★例題5 問いに対する答えとして最もよいものを一つ選びなさい。

江戸時代以前、人々の普段の生活はとても単調で、毎日ほぼ同じ事の繰り返しだった。特に農村は娯楽もほとんどなく、食生活も貧しかった。白米や酒は贅沢品で、めったに口にすることができなかった。しかし、正月や祭り、結婚式などは特別な日だった。この日だけは白米や餅を食べ、たっぷりの酒を飲む。いい着物を着て、歌や踊りに興じる。このような「非日常」を思い切り楽しむことで、人々は「日常」のつらさを忘れることができた。

民俗学者の柳田國男は、このような特別な場面を「ハレ」、それ以外の毎日の生活を「ケ」と名付けた。昔は「ハレ」と「ケ」がはっきりと分かれていて、それが人々の生活にリズムを与えていたと考えたのである。

では、現在はどうか。もちろん結婚式などは今でも人生で特別な場面であろう。しかし、近代化が進んだ結果、昔は特別な日にしかできなかったこと——おいしい物を食べたり、綺麗な服を着るなどということは、すっかり普通のことになった。TVだ映画だカラオケだと、娯楽も日常化している。現代は「ハレ」と「ケ」の境界があいまいになっているのである。

問い この文章の内容として最も適切なものはどれか。

- 1 昔は「日常」と「非日常」がはっきりと分かれていたが、今はその差があまりわからなくなっている。
- 2 昔の生活は単調でおもしろくなかったが、今は豊かになって日常生活も楽しいものとなっている。
- 3 結婚式やお正月は昔は「非日常」の場面だったが、現在では「日常」になってしまっている。
- 4 現代の人々も、昔のように「ハレ」と「ケ」をはっきりと分けて生活しなければならない。



ぜんたい
全体をつかもう

1) キーワードからテーマを推測する

「非日常」、「日常」、「ハレ」、「ケ」 → テーマは、「非日常」と「日常」?

2) 「対比」に注目する

江戸時代以前 … 昔 は「ハレ」と「ケ」がはっきり分かれていて、
 ↑ ↓ 対比
 では、現在 はどうか。… 現代 は「ハレ」と「ケ」の境界があいまいになっている

3) 「言い換え」に注目する(「ハレ」と「ケ」の意味を確認する)

しょうがつ まつ けっこんしき とくべつ ひ 正月や祭り、結婚式などは特別な日	↔	ふだん せいかつ 普段の生活
言い換え		言い換え
ひにちじょう たのしみ 「非日常」を…楽しむ	↔	ひにちじょう わすれ 「日常」のつらさを忘れる
言い換え		言い換え
とくべつ ばめん 特別な場面を 「ハレ」	↔	まいにち せいかつ 毎日の生活を 「ケ」

4) 全体をまとめる

江戸時代以前は、「ハレ」(=非日常)と「ケ」(=日常)がはっきり分かれていた。

現代は、その境界があいまいである。

せんたくし くら
選択肢と比べよう

- 1: 正解
- 2: 昔の生活がおもしろくなくて、今の生活が楽しいということではなく、「ハレ」と「ケ」が今の生活ではっきり分かれていないことが最も重要な点である。
- 3: 結婚式は「今でも人生で特別な場面」と書かれている。
- 4: 分けて生活しなければならないとは書かれていない。



練習6 問いに対する答えとして最もよいものを一つ選びなさい。

わたしたちはふつう、視野に入っているものはみんな見ている、と思いやすいのですが、視野に入っても注意していなければ見えないものです。普段でもそうです、自分が足を怪我すると、町の中には足を怪我した人が思いの外に多いことに気がつきます。よく若者が電車に乗って老人に席を譲らないといいますが、あれは老人は網膜の上には映っていても、意識のアンテナが働いていないのだと思います。若者には同世代の若者がよく目についたのは、自分の経験からも分かりま

(安野光雅『絵のある人生』岩波書店)

問い この文章の内容として最も適切なものはどれか。

- 1 若者が老人に席を譲らないのは、老人が視野に入っていないからである。
- 2 若者は同世代の若者に対してだけ意識のアンテナを働かせているのである。
- 3 目に入ったものでも、意識を働かせていないと、実は見えていないのである。
- 4 我々は、何に対してでも、意識のアンテナをよく働かせなければならない。



練習7 問いに対する答えとして最もよいものを一つ選びなさい。

ニュースの価値や情報を決めるのは、客観的な基準やデータだけではなく、たまたまそのニュースを担当した人の感情や好き嫌いが大きく働いている。この「感情や好き嫌い」は、「主観」と言い換えることもできる。客観の反対。つまりテレビのニュースや新聞の記事は、何を報道するかしないか、何をニュースにするかしないかを定めるその段階で、もう客観的などというレベルではない。

(森達也『世界を信じるためのメソッド ぼくらの時代のメディア・リテラシー』イースト・プレス)

問い この文章で筆者が最も言いたいことは何か。

- 1 ニュースは、その内容を選択する時点から報道する側の主観が入っている。
- 2 ニュースの価値は、それが客観的であるかどうかによって決まる。
- 3 ニュースの担当者は、自分の感情や好き嫌いに気をつけるべきだ。
- 4 ニュースは、客観的な基準を気にせず、主観的に報道すればよい。

[言い換え]

練習8 問いに対する答えとして最もよいものを一つ選びなさい。

人間は何であれ、自由が好きです。「自由」とは「自分勝手^{じぶんかって}」^(注1)と考えてもらってもいいでしょう。人間は自分勝手を好みます。だが、他人の勝手になることを嫌^{きら}います。憎^{にく}みます。誰もが自分勝手に振舞^{ふるま}おうとすると、他人の勝手と衝突^{しょうとつ}します。自分の勝手を通^{とお}そうとすると、他人の勝手を押しとどめなければなりません。またどんなに自分の勝手を押し通^{とお}そうとしても、相手のほうが強力ならば、相手の勝手に押さえ込ま^{おさ}れてしまうこととなります。「自由」になろうと思うと、やっぱりだということがわかるでしょう。

(鷲田小彌太『考えることが苦手な人たちへ 10代からのプチ哲学のすすめ』こう書房)

(注1)自分勝手: 他人のことは考えず、自分の思いどおりに行動すること。

問い この文章で筆者が最も言いたいことは何か。

- 1 人は皆自由になりたいと考えるが、自分勝手な行動はやめなければならない。
- 2 人は何かをさせられるのは嫌だが、完全に自由になることを好むわけでもない。
- 3 人が各人の自由を勝ち取るためには、ほかの人と衝突^{しょうとつ}することが重要である。
- 4 人は皆自由になりたいと考えるが、他人と衝突するので大変だ。

[言い換え]

練習9 問いに対する答えとして最もよいものを一つ選びなさい。

できる人と思わせるためには下準備が必要である。しかし、実は最大の下準備は、何ととっても「自分を知る」ことである。

というのは、できないものをできるように見せるのはかなり難しいが、自分の長所を前面に出せば、できるように見せるのはそう難しくないということがある。もう一つは、人間というのは、よほど嫌いな相手でない限り、相手の短所より長所のほうに目が行くよう出来ていることが、さまざまな心理実験で明らかにされている。いわゆる「隣の芝生は青い」現象である。

だから、欠点を隠^{かく}そうとするより、長所を目立つようにしたほうが、できる人に見えるのだ。現実^{まこと}に、社会のほうも、欠点のない何でも屋のような人間より、多少欠点があっても、長所の抜きん出た人間のほうを重用^{ちゅうよう}するようになってきている。

(和田秀樹『趣味・教養を「武器」に変える 和田秀樹の“最終最強”知的生産術』毎日新聞社)

問い この文章で筆者が最も言いたいことは何か。

- 1 自分をよく分析^{ぶんせき}し、欠点が目立たないようにすれば、他人からできる人と思われる。
- 2 周囲の人に自分の長所も短所も理解してもらえば、できる人と思ってもらえる。
- 3 できる人と思われるには、何かをするとき、十分に準備し、欠点を補う必要がある。
- 4 できる人と思われるには、自分の長所を周りの人によくわかるようにするのがよい。